

夏休み経済教室 東京教室 2 日目の記録

日時 2026 年 8 月 19 日（水） 9 : 30～16 : 00

場所 慶應義塾大学三田キャンパス 北館ホール + オンライン同時配信（Zoom）

参加者 85 名（会場）、103 名（オンライン）、関係者を含む合計 188 名

主な内容：主催者挨拶のあと、新井明の進行のもとで、以下の内容が展開された。

<1 コマ目> シン経済教育の提案

- ・篠原総一先生より、シン経済学習の基本的考え方が提示された。経済の定義を「私たちの暮らしを、みんなで支え合う、社会のしくみ」として、6 つの概念と暮らしを支える 4 つの基盤を教えるという、OS に相当する内容が提示された。
- ・佐藤英司先生より、篠原提案をうけて「経済分野 10 講案」が紹介された。これは 4 つの基盤のつながりを 10 講にわけてプログラム化したもので、導入からはじまり、市場のしくみ、市場だけでは十分に扱えにくい課題を扱い、最後の 10 講で全体を統合するという構成のプログラムである。OS に基づいたプラットフォームとも言うべき内容である。
- ・新井より、篠原、佐藤提案をうけて授業案に落とし込んだ具体的な各講の授業案の紹介があった。中学版、高校版の構成の紹介と、サンプル原稿の紹介があった。OS・プラットフォームを受けたアプリに相当するものである。

<2 コマ目> 提案を受けてのパネルディスカッション

- ・1 コマ目の提案をうけて、3 人の先生（河原和之先生、金子幹夫先生、栗原久先生）と提案者の篠原先生、佐藤先生を加えて 5 人での討論があった。河原先生からは中学校での実践から多様な導入事例やシン経済学習プランの評価の紹介があり、金子先生は高校の実践経験から、第 1 講の授業事例の紹介、栗原先生は教科教育の立場から、篠原・佐藤提案の構成原理と問題点を指摘された。登壇者による討論では、栗原先生がとりあげた入試問題で取上げられる問屋の意味に関して、篠原先生、河原先生から補足のコメントがあり、素朴理論とここでの肌感覚の違いなどが取上げられた。
- ・それをうけて、実感から理解へどのように接続させるか、事例をどこまで広げることができるのかの 2 点に討論内容を絞り、シン経済教育の提案をうけ 5 人の先生の討論が行われた。また、参加をされていた大杉昭英元視学官と教科書編集者からのコメントを受けた。

<3 コマ目> 提案を受けての実践発表と質疑

- ・中学校は、市川慶太先生から、今年の夏休み経済教室での篠原提案に刺激されて実践を行った「中学生にとって役立つ経済学習」授業が紹介された。経済の本質とカリキュラムマネジメントとわくわくと実用性を掛け合わせた 14 時間の授業実践で、シン経済教育の可能性を開いた前哨戦ともいうべき実践であった。
- ・高等学校は、杉浦光紀先生から「社会のあり方を考える生徒を育成する経済学習」が紹介された。佐藤提案の第 2・3 講を踏まえた実践で、カレーの背景の探究、フリマの交換から貨幣の役割、新聞記事からのキーワードの読み取りという、生活実感から本質にせまる実践で、シン経済教育のこれからの実践可能性を提示したものであった。

<4 コマ目> 全員参加による「みんなで話そう」

- ・当日の参加者を 6～8 人のグループに分け、自己紹介、現場での実際、提案された内容を実践できるか、提案に対する要望を話し合った。当日は、中学 4 グループ、高校 4 グループでの話し合いとなった。
- ・各グループの司会役の先生から、グループでの内容の報告があり、全体で共有した。
- ・中学校のグループからは、すぐに実践したい内容がある。導入で分かりやすいネタで引きつけることはできるがその先が難しい。授業の評価についてどうしたらよいか。イラストを導入したいなどの意見が表明された。
- ・高等学校のグループからは、今回の提案は画期的との意見に対して、これまでの経済教育とどこが違うのか明確にして欲しいという声も出された。イラスト授業はあらゆる生徒に学びを与える。具体性を担保するだけでなく、理論や現状分析も与える必要があるのではという意見もだされた。それぞれのグループの意見や質問に対して、登壇の先生や関係者からの回答があり、充実した話し合いの時間となった。最後に、進行役からこれを出発点にして実践をお願いしたいとのまとめがあった。

補足：各報告者の所属は省略。プログラムを参照。資料を後日掲載予定。（記録と文責：新井）